

【調査報告】

'01中国女文字調査研究報告

遠藤 織枝

Nüshu, Women's Script, Report on '01

Orie ENDO

中国湖南省江永県の1部に伝わる女性だけの文字—現地では「女書」という—の調査を続けていて、本誌にも9-1号10-1号11-1号12-2号13-2号とそれぞれの調査での知見を報告してきている。本稿は2001年3月末に行った、現地の女性たちが女文字で書いて伝えてきた「抗日歌」の調査の報告である。

キーワード：女書、抗日歌、義年華、楊細細、抗日救亡歌唱運動

1、「抗日歌」とは

中国は、1930年代の初めから1945年にかけて、日本との戦争を続けてきた。その間に民衆の志気を昂揚させ、戦意を高めるための、歌唱運動が組織された。^(注1) その間に歌われた、反戦、抗戦の歌をまとめて抗日歌と名づけられている。これらの歌には、民衆の中から生まれたものと、歌唱運動を通じて作詞作曲されて広められたものがある。歌唱運動は全国的に推進されたため、全国各地で抗日歌が作られ、歌われた。抗日歌と1口に言っても、積極的に敵と戦うという意志を示すものから、戦火で故郷を追われ、その地から望郷の思いを歌うもの、戦闘で荒れた故郷を嘆くものなど、その「抗日」の内容も一様ではない。

たとえば、東北地方のものものとして、次のような歌がある。
「松花江のほitori」

我が家は東北松花江のほとりにあり／そこには森林と炭鉱があり／さらに見渡す限りの大豆と高粱畑がある／我が家は東北の松花江のほとりにあり／かの地にはわが同胞（はらから）／そして年老いた父と母がいる／ああ、九・一八、九・一八／あの悲惨なときから／九・一八、九・一八／我が故郷を離れ／あの豊かな宝庫も棄て去って／流浪！流浪！今関内をさすらい続け／いつの日いつの月／我が愛する故郷に帰れるか／いつの日いつの月宝庫を取り戻せるか／父よ母よ／共に喜びあえるのはいつの日か

『図説中国近現代史清 新版』（法律文化社 1993）から河北民歌としては次のような例がある。

「老百姓抗日歌」（民衆抗日歌）

日本を倒せ 裏切り追い出せ／みんな一緒に立ちあがれ／君もがんばる 僕もやる／ みんなで相談すれば難しくない／君は言わない 力があると／ 僕も言わない 金があると／金と力あれば 出してくれ／戦うやつは いいやつだ

劉玉書編『中国民間歌曲精選』（北方文芸出版社 1997）

所載のものを遠藤が訳した。

2、女文字伝播地域の抗日歌

女文字の伝わる湖南省江永県の女性たちは、従来その地で起こった歴史的な事件なども、女文字で書き残している。その中には、唐代末期に起きた黄巢の乱のこと、明の皇帝が通って行ったこと、太平天国の軍隊がこの地に来て、県知事が慌てて逃げ、村人は不安におののいていた、というようなことも歌われ、女文字で記録されている。日本軍も1944年にはこの地を通り、この県には約40日間駐留した。その間の事情も女文字で書かれている。

この地では、女性たちは結婚式の時には、歌堂という儀式を行い、婚礼の三日前から、別れを惜しんで歌い合ってきた。そして式の3日後には、

別れの辛さや、嫁ぐ娘の幸せを祈る歌を作り、それを「三朝書」^(注2)に女文字で書いて贈った。自伝を書いて、それを歌い聞いてもらって慰めることもした。自分たちで、歌を作りそれを人々が集まって歌い合うというのはこの地の文化的行事でもあった。

その伝統に則って、戦争中にも自分たちのおかれた苦境を歌にして共に歌い、それを書いて伝え合うというのは、とても自然な行為であったと言える。

99年1月に現地に女文字の原資料を探しているとき、歌のうまい女性を紹介されて取材していて、とつぜん、その女性が戦争当時の歌だといって抗日歌を歌い始めたことがあった。戦争のときこの地の女性たちが作ったものらしかった。黄甲嶺郷三脉下村在住の楊細細という女性（瀟蒲鎮出身）であった。いろいろな歌を知っているといいながら、こんな歌もあると、長い抗日歌をほとんど一気に歌い上げた。

あとでその内容を調べると、1940年代のことが歌われていることがわかった。歌が女文字を媒介に伝わる例が多いので、どんな人がこの歌を作ったのか、その人は女文字もよく書ける人であったのではないかと興味を湧いた。歌の作者から女文字の書き手の実像がつかめるかもしれないと、期待も出てきた。

99年4月に楊細細を再訪し、歌の作者を尋ねたところ、楊は自分が作ったという。まさか目の前に探す人物がいるとは思ってもよらず、非常に驚かされた。楊とのインタビューの報告は『ことば』20号（現代日本語研究会1999）に載せている。

この時の楊の歌（以下「楊歌」と略記する）と大筋において一致する歌が、趙麗明編の『中国女書集成』（清華大学出版社1992、以下『集成』と略記する）に載せられている。同書では「抽兵歌」とされ、義年華^(注3)が女書で書いたものを翻字したものである。（以下この歌を「義歌」と略記する）

「抽兵歌」と抗日歌はことばの意味は異なるが、現地の人たちは同じ歌のことを両様に言っている。同じ歌を指しているので、引用以外は「抗日歌」

に統一して進める。

まず楊細細の歌の漢字化したものは以下のとおりである。(日本語訳は文末に掲げた) なお、楊の歌は現地の方言で歌われているので、蒲念先という方言と北京語のわかる現地の人に聞いてもらい、漢字訳をつけてもらった。

2-1 2つの抗日歌

2-1-1 楊細細が歌った抗日歌 (日本語訳は章末に載せる)

- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1 静座娘房胡思想 | 2 思想世間好可憐 | 3 民国出生遭大難 | 4 吵鬧人民不太平 |
| 5 中国出了蒋介石 | 6 打起日本不留情 | 7 日本鬼子計策大 | 8 座起飛機滿天遊 |
| 9 想起飛機真利害 | 10 省州県府尽炸平 | 11 亦是上峯下下令 | 12 各保村鄉來抽兵 |
| 13 抽起征兵去訓練 | 14 訓練三年成老兵 | 15 年齡合格二五六 | 16 再抽一直三十三 |
| 17 及格年齡尽抽了 | 18 抽起百姓不安然 | 19 家中三人抽一子 | 20 家有四人抽一双 |
| 21 十八抽到四十五 | 22 還有家中幾多人 | 23 先抽之人尽不算 | 24 還有每甲要一兵 |
| 25 身富力強尽抽了 | 26 留回老幼在家中 | 27 留回老幼又無用 | 28 計要清早在山辺 |
| 29 如今世界是不好 | 30 人人大家有寒心 | 31 如今世界是不好 | 32 人人大家去当兵 |
| 33 去了家中無人做 | 34 可憐家中老少人 | 35 上山左右去打仗 | 36 一仗死了好多人 |
| 37 当兵之人尽不算 | 38 路上人骨白如霜 | 39 想起当兵急不尽 | 40 急起捐疑不公平 |
| 41 富家之人得事干 | 42 半年飢飽又要捐 | 43 富家之人得事干 | 44 無錢之人受凄寒 |
| 45 如今民国二十八 | 46 幾時天改定太平 | 47 如今世界早平靜 | 48 百姓回家共團圓 |

次に『集成』に収められた同じ内容の歌を示す。

2-1-2 義年華が筆記した抽兵歌 (日本語訳は章末に載せる)

- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1 静座房中無思想 | 2 思想世間好可憐 | 3 中国出了蒋介石 | 4 打起日本不留情 |
| 5 日本鬼*計策大 | 6 座起飛機滿天遊 | 7 想起飛機真利害 | 8 省州県府尽炸平 |
| 9 亦是上司下命令 | 10 各省区鄉來抽兵 | 11 家有三人抽一子 | 12 家有四人抽一双 |
| 13 抽出今兵去訓練 | 14 訓練三年成老兵 | 15 十八抽到四十五 | 16 還有家中幾多人 |
| 17 先領合格二五六 | 18 再抽一期三十三 | 19 年老之人難耕種 | 20 田地拋荒亦無糧 |

- 21 有錢之人得事干 22 無錢之人苦難当 23 政府下令來捐款 24 下面捐款不留情
25 捐了錢銀尤小可 26 再捐糧食苦難当 27 逼得人民無路走 28 売サイ売女來填債
29 富家有錢捐不到 30 半年飢飽亦開捐 31 今年民國二十九 32 幾時天休定太平
33 十五十六日好遇 34 十七十八不安然 35 父母生下如珠寶 36 压迫当兵奈不可
37 如今世界就不好 38 人人養崽去当兵 39 崽去当兵無人做 40 可憐家中無少人
41 心中想起多痛惜 42 父母妻子淚双流 43 当兵之人尽不算 44 路上枯骨白如霜
45 一仗失兵無千萬 46 再抽独子断肝腸 47 父母心中如刀割 48 妻子儿女靠何人
49 一家老少鳴嗚哭 50 哭得三魂少二魂 51 抽了丈夫無人做 52 女人不能種田庄
53 父母逼得自縊死 54 妻子逼得改步行 55 透夜不眠透夜哭 56 一家大小拆散行

「楊歌」「義歌」とも、内容からみると、直接、抗日というのではなく、働き手が徴兵されて村人たちが困っていることを歌うのが中心である。村の若者たちが次々と徴兵され、女性と年寄り・子どもだけが残され、その中でも金持ちはいいが、貧しいものはもっと貧しくなると恨んでいる歌である。

用語に従来の女性たちが歌った歌に使われたものが多いこと、表現の仕方が従来のものと似ていることがわかる。たとえば、冒頭の「静座房中胡(無)思想」の句も、従来の歌の冒頭とよく似ていて、『集成』p309の歌の冒頭の「身座空房把筆写」、p331の歌の冒頭「身座房中自思想」と類似している。歌が「静かに部屋に座って筆を執ります」のような句で始まるのは「三朝書」など女文字で書かれる歌の大きな特徴であるが、抗日歌も同じような句で書き始めている。また、第4句「…人民不太平」は『集成』p475の「太平天国永明を行く」という歌の中の「且唱清朝不太平」と類似し、第34句「可憐家中老少人」は同じ「太平天国…」の歌の「可憐世間老少人」と酷似している。さらに第38句「路上人骨白如霜」と全く同じ句が「太平天国…」の歌にも出てくる。

抗日歌も、この地の女性たちが昔のことを歌い、生涯を嘆いて歌ったその伝統の上に、同じような語や表現修辭を用いて作られている。歌うとき

のメロディーも、従来の歌の型にはめて歌われる。つまり、今までのこの地の女性たちが歌った歌の句を踏まえて作られていて、伝統的な歌のメロディーで歌われるのである。だから中国全土で歌われた抗日歌とはかなり様相を異にしている、多くの抗日歌のような、ストレートな日本軍敵視や、激越な抗戦の歌にはなっていない。

なお、約1000歌の歌を収めた『抗日戦争歌曲集』（解放軍歌曲選集編輯部編 中国青年出版社 1957）にはこの歌は載せられていない。

2-2 「楊歌」と「義歌」の比較

「楊歌」の第1句は「…胡思想」となっているが、「義歌」では「…無思想」になっている。意味はやや異なるが、大差はない。2句は同じ。「楊歌」の3, 4句は「義歌」にはない。また、「楊歌」の19, 20句が「義歌」では、「楊歌」の12句の次に入っている。また、「楊歌」の17, 18句が「義歌」にはない。「楊歌」の23-30、35, 39, 40, 43, 44, 47, 48句も「義歌」にはない。「楊歌」にあつて「義歌」にない句が17句ある。「義歌」の31句の「民国29年」が「楊歌」では「民国28年」となっている。

2人の歌は後半で共通部分がなくなり、「義歌」の33句から後は、44, 45以外は「楊歌」と全く別の歌になっている。「義歌」のは、家族の中で息子や夫が徴兵されて途方に暮れる老人や女の姿が具体的に歌われる。「楊歌」は村人一般の苦しみを歌い、「老幼」と一括りに歌うのに対して「義歌」は父、母、妻、子、と家族の一人一人に目が向けられている。

99年4月、楊細細にこの歌を作ったときの状況を聞いた。楊は

「夫が徴用された。母が亡くなったとき、夫がいなくて葬式もできず、とても悲しかったから、その思いをこめて自分で作った」「夫が引っ張られたり、親がいなくなった可哀想な娘たちと一緒に歌ったからよく覚えている」「女文字は自分では書けないから、自分が歌って他人が書いた」「桐口の人と結交姉妹をしていた。桐口の人が一番上で大姉で、その大姉の所へ行って一緒に歌った」

と言っていた。桐口の人とはだれなのか、今回 3 たび訪ねて確かめた。今回の聞き取りでは楊は次のように語っている。

自分のことを言っている部分は自分が作った。他はみんなで作ったところもある。結拜姉妹が 7 人いた。上江墟の桐口、龍田、銅山嶺の河淵、黄甲嶺の谷母溪、魯子田にそれぞれいた。一緒にいるとき抗日歌を歌った。7 人はみな歌えた。義年華は 7 人の 1 人ではない。

義は 10 何年前に谷母溪の親戚を訪ねてきて、半月ぐらい滞在した。そのとき一緒に歌った。一緒に食事をした。義年華はみんなの歌ったものを女書に写した。

抗日戦争終了後は抗日歌を歌ったことはない。

楊は女文字が書けない。楊たちが作った歌を女文字がよくできた義年華が記録するという経過が楊のことばで確認できた。つまり、『集成』中の抽兵歌は楊たちが集まって作った歌を義年華が聞いて、女文字で記録したもので、同根の歌ということになる。

それにしては、なぜ「義歌」と「楊歌」の内容に差が出ているのであろうか。

この地の女性たちも、だれでもが女文字が書けるわけではない。むしろ、書ける人が少なくて、書けない人は書ける人を書いてもらうことの方が多かった。書ける人の中でも、美しい文字が書けることと、いい文章が作れる人が尊敬された。義年華はいい文字が書けて、いい歌が作れる人として知られていた。だから、楊たちの歌に義年華が自作の歌を付け加えたということが考えられる。それは、「義歌」の語句と義年華の自伝の中で使われているのと同じものであったり、似ていたりすることから言える。たとえば、「義歌」の 42 句の「涙双流」は、義年華の筆写した歌によく使われているし、55 句の「透夜…」の句は義年華の自伝にそっくり同じ句が見出される。又、歌の内容からみても、義年華は歌の中には、家族の間の不幸を歌

ったものが非常に多い。だから、抗日歌も後半は自分の不幸な境遇などともからめて、付け加えたことが想像されるのである。

3、抗日歌の作者と伝わり方

楊の「自分が作った」という発言の真偽を確かめるため、またどの程度の範囲で歌われたかを知るため、女文字が伝播していた村村で聞き取り調査を行った。その結果わかったのは以下のような事実である。

3-1 「抗日歌」を知る人

陽煥宜（91歳 楊家村出身 銅山嶺農場在住）は、この地の女書の最後の伝承者の一人と思われるので毎回訪ねているが、今回もその筆記能力を調べた後で、「戦争のときのことを覚えていますか」と聞いてみた。「ア覚えてるよ。日本兵はこんな長い革の靴をはいてた」とひざの長さを示したと思ったら、急に歌い出した。抗日歌だった。

日本軍と、この歌との結びつきの強さを如実に示すものであった。91歳とは思えない張りのある声で歌い始め、以下の22句を歌い、後は忘れたと言って途中でやめた。

- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1 静座娘房胡思想 | 2 思想世間好可憐 | 3 民国出世遭大難 | 4 吵鬧人民不太平 |
| 5 中国出了蒋介石 | 6 打起日本不留情 | 7 日本鬼子計策大 | 8 座起飛機滿天遊 |
| 9 日本鬼子真靈頭 | 10 臬州府院尽炸平 | 11 雖知下個命令 | 12 村村抽征兵 |
| 13 抽起征兵去訓練 | 14 老兵三年去打仗 | 15 上面再来下命令 | 16 每甲再来抽征兵 |
| 17 家中三兒抽一子 | 18 家中四兒抽一双 | 19 十八管到四十五 | 20 得剩老人在家中 |
| 21 有錢有米又無用 | 22 燒柴吃水在山中 | | |

初めの8句は「楊歌」と完全に一致する。13句も同じ。17, 18, 19句は「楊歌」の19, 20, 21、句とほぼ同じである。それ以下はだいたいの意味を覚えているが語句の記憶があいまいになって、少しずつずれたり、変わったり

しているが、「楊歌」が元になっていることは明らかである。突然歌いだし、長い歌の半分をほぼ正確に歌えたのである。

この歌を作った人が誰か知っているかと尋ねると、

「娘たちが集まって、ひとことひとこと作っていた。自分は一から聞いて真似をして歌った。ダンナさんが徴兵されて生きた寡婦になったので、その活寡婦が作ったとも聞いている」という。

義年華も寡婦だったので、その中に義年華もいたかと尋ねると、それは違うと言う。義年華のことは自分もよく知っているから、作者でないことも知っていると言う。

いつごろ歌っていたかと聞くと、

「今から60年前に歌っていた。男たちが徴兵されたとき歌った。戦争の後は歌わない。本にある義年華の歌とだいたい同じ。義年華、高銀仙が死ぬ前、趙麗明の本^(注4)にあることを教えてくれて、一緒に歌ったことがある。

娘たちが歌っているのを義年華が女書で書いた。楊家村に2人、高家村に7、8人の活寡婦がいて、歌っていたのを義年華、高銀仙が聞いて知っていた。自分は若かったから、その後で義や高に聞いて知った。(注：戦争の後は歌わないというのと、義年華・高銀仙が死ぬ前歌った、というのと、矛盾するが、60年前は戦争中で村人みんなが歌っていたこと、義年華、高銀仙らが死ぬ前というのは女文字の研究者が来るようになり、記録のために歌ったことで、質的に違うと考えているのであろう。)

1998年から女文字を書き始めた何静華(61歳 允山鎮出身 県城在住)
も抗日歌は少し知っていると言って次の18句を歌ってくれた。

- 1 静座娘房胡思想 2 想起世間真可憐 3 民国出世遭大難 4 日本侵略人不安
5 中国出了蒋介石 6 打起日本不留情 7 日本飛機真利害 8 省州県府尽炸平
9 只有上峯下命令 10 各郷各保来抽兵 11 抽起新只来訓練 12 訓練三年成老兵

13十八抽到四十五 14再復抽到三十三 15四十五歳尽抽了 16家中剩了没兩人
17日本鬼子志気大 18座起飛機滿天遊

1, 3, 5, 6, 8, 12, 13句は「楊歌」と同じである。2, 7, 9, 11句は1部分の語句が異なっているが、「楊歌」のバリエーションであることは明らかである。

何靜華に作った人を知っているかと尋ねたところ、以下のように答えてくれた。

母親がよく歌っていたので覚えた。母も兄もよく歌えた。夫も知っている。母は自分の10歳前後のころよく歌っていた。この歌を作った人は、松柏郷にいる夫の兄の妻によると、黄甲嶺郷の樸尾出身の女性だそうだ。でも、その人は、未亡人で10年ぐらい前になくなったと聞いた。

その後、黄甲嶺郷の下白馬村で70歳以上の女性に聞き取りをしていたとき、傍にいた男性が朗々と歌いだすのに出合った。盧石徳という75歳の男性だった。この歌を歌う男性としては初めての例だった。彼の歌は以下のものであった。

1 静座娘房無思想 2 想起世間好可憐 3 民国出了遭大難 4 騒乱人民不太平
5 中国出了蒋介石 6 打起日本不留情 7 日本鬼子計策大 8 想起飛機真利害
9 省州県府尽炸平 10 亦是上下方命令 11 各保郷甲来抽兵 12 抽起新兵去訓練
13 年々合格二五六 14 再抽一期三十三 15 十八抽到四十五 16 再抽一期三十三
17 身富力強尽抽了 18 留帰幼老家中

「楊歌」と比べると、3, 5, 6, 7, 8, 9, 15句は同じ。1, 2, 4, 10, 11, 12句は1部の語が異なるが、ほぼ同じ意味の他の語に置き換えられている。1、の「…無思想」は「義歌」と同じであるが、全体としては「楊歌」の流

れと言える。

盧石徳に聞いた歌の作者や歌ったときの状況は以下のものであった。

日本軍が来る前から歌っていた。村の男の人も女の人も歌っていた。暇なとき、だれかの結婚のときなどに歌った。よその村の人が来て歌っていたので聞いて覚えた。大勢の人が、徴兵された人の寡婦たちが作った。戦争後は歌わなかった。

戦争のとき、自分は15,6歳で徴兵されなかったが、国民党も蒋介石も日本軍も徴兵するから憎いと思って歌った。昔はもっと長い歌が歌えた。今は忘れた。日本軍が来たとき、40日間逃げた。日本軍は白水に駐留した。村の人が1人殺された。白水から20人ぐらいの兵隊が来た。豚、鶏、米などなんでも見るものは持って行った。初めに1人殺したので、1晩全く眠れず、17,8箇所を逃げ惑った。

錦江村の胡女という86歳の女性（甫尾村出身）も、娘のとき人が歌うのを聞いて覚えたが、今ははっきり覚えていないと言いながら以下のように歌ってくれた。

1 静心娘房無思想 2 思想世間好可憐 3 中国出了蒋介石 4 打起鬼子不留情
5 日本鬼子計策大 6 座起飛機滿天遊 7 飛機本是真利害 8 省州県府尽炸平

.....

留起老幼在家中 十八抽到四十五 再抽一期三十三

初めの部分だけだし、順序も変わっているが、2,3,5,6,8句は「楊歌」と同じである。

胡女の「抗日歌」に関わる話は以下のとおりであった。

子どものとき抽兵歌を歌ったことがある。日本軍が来たのは子どもを

生んだ3日目だった。子どもが生まれた祝いの料理を作っていたが、全部持っていかれた。日本軍を痛切に恨んでいる。この歌は抽兵中に歌った。日本軍が行ってしまってから祝った。踊ったり歌ったりした。憎まないわけないでしょう。

錦江村の何金色（72歳 龍田出身）は抗日歌を最初は知らないと言っていたが、テープを聞いたら知っていると言って朗々と歌いだした。学校の先生ではないが、先生に習ったという。

1 静座娘房無思想 2 思想世間好可憐 3 中国出了蒋介石 4 打起日本不太平
5 家有三子抽一個 6 若有五子抽一双 7 年齡合格二五六 8 再抽一期三十三
9 十八抽到四十五 10 留下老幼受凄寒 11 有錢之家・・・ 12 無錢之家受凄寒

1句の「…無思想」は「義歌」と同じで、他の人たちが歌った初めの方の部分が少なく、一気に徴兵の個所に飛んでいる。数字の出ってくる徴兵の仕方や年齢などが歌われているが、この部分は他の多くの人々も歌っていた。この種の数字は記憶しやすいのだろう。

以上、幾人かが歌った抗日歌を比べてみた。歌った村もそれぞれ別であるし、それぞれ戦争中に歌ってその後歌っていないといいながら、語句の多くは正確に伝わっている。何人かが集まって作った、夫を徴兵された妻たちがつくった、と別々の村人たちが話していたことから、楊細細を初めとする、夫が徴兵された女性たちが作ったことは間違いなさそうである。それが女文字で書かれて村村に広がり、伝わったものと思われる。女性たちが歌っているのを聞いて男性たちも歌う人が出てきたようだ。ふつう、女性たちが嬉しいにつけ、悲しいにつけ歌ってきた歌は女性だけが歌い、男性は決して歌わないものだが、抗日歌はその内容と性質上、男性も歌う人がいたのであろう。

3-2 抗日歌の存在を知る人と伝わった地域

次に、歌うことはできなかったが、知っているとか聞いたことがあるとかの情報をまとめる。訪ねた村の地図上で北から順に記す。また、地図には聞いたり歌ったりした人の出身の村も示した。村名の前の数字は地図上の数字と一致させている。

5 夏湾村

楊寒菊（新宅村出身）

最初の夫が徴兵されて死んだ。抗日歌は娘のとき聞いたことがある。

寡婦が歌っていた。

9 錦江村

鄧相和（70歳以上 錦江村出身）

抗日歌は聞いたことがある。蒋介石のことを歌っていた。日本軍が来たとき聞いた。2, 3人集まったら歌えるが、1人では歌えない。家で姉妹たちと歌った。河淵でも錦江でも歌った。父母に教わった。10何歳のとき。

あちらこちらで歌っていたものを合わせたものだ。苦しい可哀想な気持ちで歌った。夫は結婚する前に徴兵された。母親が息子を二階に隠していたが国民党が来て出せと言った。抗日戦のテレビを見ると、涙が出てくる。

楊銀奎（70歳 田辺出身）

抗日歌を初め知らないというが、テープを聞いてもらったら、知っているという。すらすら歌えた。解放後は歌ったことがない。兄嫁はよく歌える。

日本軍は14歳のとき来た。日本兵がきたとき、山に逃げた。家は焼かれた。11人が徴兵されてもどらなかつた。父も徴兵されたが10ヵ月後にもどつた。

何静雪（71歳 銅山嶺出身）

抗日歌は以前歌ったことがある。今は半分ぐらいしか歌えない。以前

は女の子だけが歌った。日本軍が帰った後も歌った。兄嫁の胡四四が教えてくれた。

日本軍は13歳のとき来た。兄は抽兵されなかった。一人っ子は許されるはずだが、最後のころは一人っ子でも徴兵された。家では兄の代わりに、村の人に米をあげて行ってもらった。

10 甘益村

川端で落花生を剥いていた80歳ぐらいの女性。

抗日歌は三間舗で聞いた。聞いたことはあるが歌えない。結婚後3年目に夫が徴兵された。4、5年後衣服もボロボロになって帰ってきた。生活がとても苦しかった。

11 楊家巡村

朱煥（興福村出身）

抗日歌は以前歌ったことがある。娘のとき習った。夏湾に嫁いだ姉が村で歌っていた。姉の朱満珠は女書がよくできた。17、8年前に死んだ。抽兵歌は抽兵されて可哀想という意味の歌。歌堂^(注5)で歌った。扇子やハンカチに女書で書いて見て歌った。1行書いては歌った。姉の夫は抽兵された。姉は抽兵歌に、自分の考えを入れて作っていた。

18 周家村

周千玉（70歳 周家村出身）

抗日歌は10何歳のとき歌った。結婚後も歌った。周家村の年とった女性から教わった。

日本軍は9歳のとき来た。みんなは山奥に逃げた。抽兵されて、その先で祖父と父が殺された。おじさんも殺された。生活が苦しかった。家も焼かれてしまった。怒らずにはいられないでしょう。

傍にいた女性の母（谷母溪出身）が歌えたという。

19 龍洋村

道にいた50代の女性は、抗日歌を子どものとき、田辺で聞いたという。80歳以上のあるおばあさんが歌っていた。自分は歌えない。

20 鳳田村

王強国（70歳 男）

抗日歌は少し歌える。小さいとき歌ったことがある。母からよく聞いた。母は女文字が書けたし歌えた。母は潮水の出身で、歌の名人と言われていた。

欧太早生（78歳 十甲出身）

抗日歌を知っているかと聞いたら、知らないとの返事だったが、録音テープを聞いてもらったら、知っていると言った。歌詞を少しだけ朗読してくれた。

21 龍会村

義更新（77歳 雷洞出身）

抗日歌は歌える。娘時代に雷洞で聞いた。村の人が徴兵されたから歌うとき悲しかった。伯父も徴兵された。負傷して帰ってきた。みんなが歌っていたから覚えた。徴兵された人の家族だけでなく、みんな歌っていた。男は歌わなかった。歌の内容は気持ちよくない。腹がたつ。思い出すと腹がたつ。

欧陽岳奎（71歳 六甲出身）

抗日歌は半分ぐらい歌える。14歳のころ初めて歌った。父が徴兵された。教師だった。徴兵されたが逃げた。また捕まった。

22 下白馬村

楊早珠（76歳 三脉下村出身）

自分は歌えないが、活寡婦が集まって抗日歌を歌っていたのを知っている。

何六六（84歳 龍田出身）

抗日歌は結婚前、10代20代のとき歌った。寡婦が歌っていた。龍田で歌った。

日本軍が来たとき、下白馬に結婚してきていた。27歳だった。持っていたもの、豚も何もみんな持って行かれた。小さい子どもがいて、食

べるものがなく困った。生まれた子どもに鶏を食べさせるのが習いなのに、食べさせることができなかった。殺された人はいなかった。山の洞へ逃げた。7月～9月初旬まで。日本軍がいなくなったときはうれしかった。

ほかに、陽煥宜などの話から次のようなことが考えられる。

夫を徴兵された妻である歌の作者を「活寡婦」と表現するのはおもしろい。「活仏」と同じ造語のようだが、中国語では普通の言い方なのであろうか。いずれにせよ、戦争のとき夫が徴兵された女たちが作ったという楊細細の話と一致する。

何静華の話からは、作者が黄甲嶺の人であるという点で、楊細細と共通する。何の話ではもう死んだ未亡人ということになるが、そこは違う。

抗日歌を、何の兄や夫も知っているというのは男性が知っている例として貴重である。この歌が従来女性の歌の伝統の上に作られたものでありながら、歌う範囲は男性にも広がっていたことを伝えている。

石徳の話で、日本軍が来る前から歌っていたというのは、日本の軍隊が現地に入った1944以前にこの歌ができていたことを示している。もちろん、「楊歌」には「今年民国28年」と、「義歌」には「今年民国29年」と歌われているので、1944年以前につくられたらしいことはわかるのだが、歌った人の証言も得られたわけである。現地への直接の侵略は1944年でも、その前から日本軍空爆は行われていて、「飛行機ってやつはほんとに凄い」と歌うことは可能であった。

以上のいろいろな情報をまとめると次のようになる。

3-3 歌を作った人

①夫を徴兵された妻たちが作った。それも一気に作ったのではなく少しずつ作り加えていったようだ。黄甲嶺郷の楊細細はその中心人物らしい。
②上江墟鎮興福村出身の朱満珠も作った「活寡婦」の一人かもしれない。
③黄甲嶺郷櫟尾村のある寡婦で、既に死亡という話もある。

3-4 歌った人

歌っていた人については次のようないくつもの記憶がある。①活寡婦が歌った。②女性だけが歌った。③女も男も歌った。④男は歌わなかった。⑤高齢の女性が歌っていた。⑥若い女性が歌った。

3-5 歌った時期

①日本軍が来る前から歌っていた。②戦争中に歌っていた。③解放後は歌わなかった。④解放後も歌った。

①の日本軍が来る前から歌ったという情報は、歌の「今年民国28年（29年）」が日本軍が来た1944年より前のことであることとの整合性を保証している。もしも日本軍が来てからこの歌が歌われたとしたら、「今年」の年が虚偽になってしまう。解放後については歌った人も歌わなかった人もどちらもいたのであろう。

3-6 だれに教わったか

①80歳ぐらいの女性に。②母に。③姉に。④学校の先生ではない先生に。

3-7 歌ったときの心境。また、抗日歌についての思い

①日本軍が憎かった。②日本軍を恨んでいた。③かわいそうだと思って歌った。④歌の内容は気持ちよくない。思い出すと腹が立つ。

以上さまざまな意見を聞いた。どれが正しくてどれが正しくないと判断はできない。どれもその語ってくれた人々にとっては真実であったろう。

国家が大々的に抗日の歌唱運動を組織し、歌も専門家たちがたくさん作っている中で、この地の抗日歌は、官製のものとは違う独自性があることがわかってきた。その独自性は、この地に女性たちの、自分たちで歌を作り、歌い、女文字で書くという、他の地にはない独特の文化から生まれたものであろう。農村の女性たちが抗日歌を作り、女性たちが歌ううちに男性

たちにも伝わり、歌われるようになったことも、男性主導だった解放前の社会としては珍しいことではないだろうか。この歌が地理的にも互いに離れた、多くの村村で歌われ、それもかなり正確に伝わっているのは女文字があったからで、抗日歌との関連においても、この文字の果たした役割の大きかったことが知れるのである。

注1 『中国抗日戦争大辞典』（章紹嗣他編 武漢出版社 1995 p.1293 「抗日救亡歌詠運動」の項）

注2 結婚式の3日後に嫁いだ娘に、其の義理の姉妹や、姪、伯母などが歌を女文字で書いて贈る冊子。

注3 80年代、この地の女文字が世に知られ以来、この文字の伝承者として、文字資料を提供し、研究者に協力して、多くの女書作品を筆写した女性。晩年は上江墟鎮桐口村の住んだ。

注4 趙麗明の『中国女書集成』のこと。

注5 結婚式の前の3日間、嫁ぐ娘との別れを惜しんで、歌い過ごす行事のこと。

楊細細の歌った抗日歌と義年華の書いた抽兵歌の日本語訳

義年華の書いた「抽兵歌」（「義歌」）	楊細細の歌った「抗日歌」（「楊歌」）
1、静かに部屋にただ座り	1、静かに母屋に座って思い巡らす
2、世の中憐れなことばかり	2、世の中憐れなことばかり
3、中国に蒋介石現れて	3、民国になり大難に遭い
4、日本叩くに容赦はいらぬ	4、庶民の生活脅かす
5、日本鬼めは大計めぐらし	5、中国に蒋介石現れて
6、飛行機で空を飛び回る	6、日本叩くに容赦はいらぬ
7、飛行機でやつはほんとにひどい	7、日本鬼めは大計めぐらし
8、省、州、県をみな爆破	8、飛行機で空を飛び回る
9、お上の命令下に来て	9、飛行機ってやつはほんとにひどい
10、省、区、郷からそれぞれ徴兵	10、省、州、県をみな爆破
11、3人の家族から1人を連れ出し	11、お上の命令下に来て
12、4人の家から2人を引き抜く	12、どの村どの郷徴兵割り当て
13、徴兵するとすぐ訓練	13、徴兵するとすぐ訓練
14、3年の訓練で熟練兵	14、3年の訓練で熟練兵

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 15、徴兵されるは18-45 | 15、合格年齢は25, 6 |
| 16、家に残るは後何人 | 16、さらに33歳まで引っ張り出す |
| 17、まず25, 6が引っ張られ | 17、若者みんな引っ張られ |
| 18、次は33のころ引っ張られる | 18、庶民の不安募るばかり |
| 19、年老いての耕作は厳しい | 19、3人の家族から1人を連れ出し |
| 20、田畑は荒れて食糧もなく | 20、4人の家から2人を引き抜く |
| 21、金のある人は仕事もあるが | 21、徴兵されるは18-45 |
| 22、貧乏は苦しくて耐えられない | 22、家に残るは後何人 |
| 23、お上の命で寄付させられる | 23、先の徴兵で足りなくて |
| 24、下のものの寄付には冷たい態度 | 24、10戸ごとに一人追加徴兵 |
| 25、金を寄付するだけなら我慢もする | 25、青年壮年みな引き出され |
| 26、また食糧も出せとは苦しすぎる | 26、家に残るは老幼ばかり |
| 27、民衆追いつめられていきどころな | 27、老幼残って役立たず |
| 28、息子と娘を売って穴埋めをし | 28、早朝山の麓に立ち尽くす |
| 29、金持ち金あり寄付もせず | 29、今の世の中こんなに不安 |
| 30、半年後食糧足りずにまた寄付強い | 30、人の心はすさむ一方 |
| 31、今年民国29年 | 31、いまの世界はこんなに悪く |
| 32、いつの日戦終わり太平の世になる | 32、人々ことごと徴兵される |
| 33、15, 16まだ良いが | 33、徴兵されて家になく |
| 34、17, 18不安がいっぱい | 34、残るは憐れな老幼ばかり |
| 35、生んだ子を親は宝物のように育て | 35、山に登って戦に出かけ |
| 36、無理矢理兵隊に取られすべもなし | 36、一戦交えて人多く死ぬ |
| 37、今の世の中ほんとに悪い | 37、兵士の数も数え切れず |
| 38、やっと育てた子は皆兵隊にとられ | 38、路上に人骨霜のごと |
| 39、耕す人もいなくなり | 39、徴兵思えば心静まらず |
| 40、家に若者の姿もなく | 40、納税強いられ不公平 |
| 41、考えてみたら心痛み | 41、金持ちの人納税も楽 |
| 42、父、母、妻、子みな涙 | 42、貧乏人は納税すれば半年の飢え |
| 43、徴兵された人の数知れず | 43、金持ちの人仕事も楽で |
| 44、道には枯れた白骨が霜のよう | 44、貧乏人は惨めな思い |
| 45、1度の戦闘で千万の戦死 | 45、今日民国の二十八年 |
| 46、独り息子をまた引っ張られて肝を | 46、いつになったら天下おさまる。 |
| 47、父母は刀で心を引き裂かれ | 47、世界が早く平和になって |
| 48、妻と子はすがれる人もなく | 48、庶民が家でなごむのはいつ |
| 49、老いも幼きも泣くばかり | |
| 50、涙も涸れて3つの魂が2つになり | |

’01 中国女文字調査研究報告

- 51、夫引っ張られて人手もなく
- 52、女の手では田も耕せず
- 53、父母追い詰められて死を選び
- 54、妻追い詰められて別の男の嫁になり
- 55、泣いて泣いて泣き暮らし
- 56、ついには一家散り散りになる

(本研究調査は、平成12年度科学研究費補助金によるものである。)

【江永県全図】

女書伝播地域

